
星を掴まえて……。

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を掴まえて……。

【Nコード】

N4776A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

夜空の星を見ながら妹は「星を掴まえたい」と囁く。それは旅立ちの数日前の話……。

明かりのない夜。

新月の闇夜は、夜空に輝く星達を際立たせ、無数に光る星達は自分の存在を誇示するように煌く。

「お兄ちゃんは、星……好き？」

控えめに聞こえる声は夜空を見ながら呟く。

「……好きだよ」

「そっか……。私も好きだよ」

空を見ながら僕に答える留美はとても楽しそうに、笑みをこぼす。

「私は、あの星が好きなの」

「どれ……？」

彼女は指をさしながら星の名前を覚えてくれるが、沢山の星があるって分からない。

「えっとね。アレとアレと……」

彼女は、指を動かして教えてくれたのは――

「そっか……」

「うん。北斗七星って、虫取り網みたいだよな」

「虫取り網……？」

「お星様をいっぱい……いっぱい、掴まえられそうだもん」

空を見上げて、大きく両手を広げる留美。

確かに北斗七星は柄杓ひしやくの形してるから、虫取り網に見えない事はない。

「うん。あの星で――ごほごほっ！」

「あっ！ 留美っ」

「だい、じょ……ぶ。ごほっ……」

「部屋に戻ろう」

僕は留美の車椅子を押して、屋上を後にした。

僕の妹——留美は病気で、もう何年も入院している。それで、たまに今みたいな症状を起こす事がある。

病状は、ゆっくりと、でも確実に進行している。留美の元気な姿を見る事は、もうできないのだろうか……。

「今日は、もう寝ようね」

「うん……わかった。ねえ、お兄ちゃん」

「なんだい？ 留美」

「お星様……欲しい？」

ベットに潜り、顔だけを出して留美が聞いてくる。

お星様——星の事だろうけど、欲しいってどういう事だ？

「私が……プレゼン——」

「え……？」

「ううん、なんでもない」

そう言って、布団で顔を隠した留美は、

「お兄ちゃん……おやすみ」

「ん、ああ……おやすみ。留美」

そのまま眠りについた。

僕は留美の様子に少し疑問を持ったが、病室を後にする事にした。

お休み、留美。また明日……。

僕は今日も留美の病室へやってきた。

今日も大丈夫そうだ。その顔は優しい微笑み。でも、この微笑みをいつまで見れるのだろうか……。

「お兄ちゃん、今日はお星様……見れるかな」

「どうかな……」

窓の外を見ながら悲しそうに目を伏せる留美。

今日は少し曇っており、今にも雨が降りそうな天気だった。

「晴れないかな……」

「そうだね」

残念そうに窓から眼を逸らし、ベットに潜り込む。

その瞳は寂しそうな色を蓄えて揺らいでいく。

「お星様……捕まえたいな」

「……留美」

そう囁く声に、僕はどう反応したらいいのだろうか。

「お兄ちゃん……」

「なんだい？」

僕の目を見つめ、逸らす事なく何かを伝えようとしている留美の瞳。

その瞳を見ているのが、何故だか分からないが辛い。

「私が……死んだら」

「っ！ るみっ」

「お星様……捕まえられるかな」

頬を伝い、流れ落ちていく涙は、留美の手を濡らしていく。涙は止まる事なく、次から次へと溢れては、またこぼれる。

留美……なんで泣いているの？　なんで、星を捕まえたいの？

僕にも分かるように教えて欲しい。

そして今日は星が見えなかった……。

僕は走っていた。父さんから一本の電話が入ったから。

留美の容態が急変したと――。

「留美！」

ただ、ひたすら走った。いつも通い慣れた病院までの道程が、やけに遠く感じていた。

病院に飛び込み、看護師の注意する声も無視して、僕は病室へと走っていた。

病室のドアには、『面会謝絶』のプレート。
ドアを開け、僕の目に飛び込んで来たのは、妙に静かな光景だった。

「……留美」

返事はない。僕の声だけが響く。

周りには留美の担当医や看護師達——それに両親もいるのに。
誰一人、口を開こうとはしない。皆、口を真一文字に結び、身体を震わしているばかり。

「……ご臨終です」

腕時計を見ながら先生の無慈悲で無感情な声が聞こえた。
なんて言った？ 今……先生は、なんて言ったんだよ。

「留美……嘘だろ」

返事してよ……留美。お願いだから、声を聞かせてよ。

「るみ？ ……なあ、るみっ」

名前を呼んでも、何も返ってこない。いつもの「お兄ちゃん」って声すら返ってこない。

「声を聞かせてよ。なあ、留美……嘘だよね？ もう起きてよ。お兄ちゃんを騙すのはよくないぞ」

だけど、留美からは返事はない。

母さんの堪えきれない嗚咽が室内に響き、父さんの手が僕の肩に置かれた。

嘘だ……嘘だよ。僕は認めない。こんな事、絶対に——
「るみー！」

涙が自然と溢れてくる。認めたくないのに、どこかで認めている。
一粒、一粒、星の煌きの如く流れ落ちていく涙。
僕の声は、ただ虚しく室内に木霊していた。

その後の手続きは事務的に淡々と進み、病室は綺麗に片付けられていた。

留美のいた場所は、今はただの無機質な部屋。薬品の匂いだけが立ち込める普通の病室。

……もう、いないんだ。

そう実感してしまうと、また頬を伝っていくものがある。

帰り際、看護師の一人が僕に、「これ……預かっていたの」と一通の手紙を渡してくれた。

その手紙は、留美からのものだった――。

お兄ちゃんへ

毎日、お見舞いに来てくれてありがとう。

お兄ちゃんの声が聞ける事、お兄ちゃんに会える事がすごく嬉しかったよ。

お兄ちゃんがいてくれたから、私は頑張ってた。

苦しい時も、辛い時も、いつもそばにはお兄ちゃんがいてくれた。

どれだけ感謝しても足りないくらい、感謝の気持ちでいっぱいだよ。

だから、お返しがしたかったの。

私の大好きなお星様を、大好きなお兄ちゃんにプレゼントしたいの。

私が空に行って掴まえてくるね。

空には大きな虫取り網があるから、掴まえてプレゼントするね。

いっぱい、いっぱい掴まえて、お兄ちゃんにあげるね。

お兄ちゃんが喜んでくれると嬉しいから。

お星様掴まえて、お兄ちゃんにプレゼントしに来るから。

それまで、ちよつとの間バイバイだよ。

それじゃ、いってきます。

手紙はそう書かれていた。

読み終えた僕は、溢れてくる涙を止める事が出来なかった。

留美の言っていた言葉——『星をプレゼント』の意味がようやく分かった。

僕へのプレゼント……感謝の気持ちの表れ。

そして、留美は自分の死を受け入れていた。残された僕が悲しまないように”約束”をくれたんだ。

これは旅立ち——留美は空へ旅立った。星を掴まえに……。

窓から見上げた空は、星が瞬き始めたばかりだった。

今日も僕は空を見上げる。

無数の星が瞬き、輝きを放つ夜空。

優しい光りを蓄えた星が一つ流れ、輝きながら虫取り網の中へ入った。

——お兄ちゃん、お星様捕まえたよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776a/>

星を掴まえて……。

2010年10月8日15時07分発行